



# 寺山修司研究—アングラ文化における言語表現—

劉, 夢如

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7944号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007944>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論 文 内 容 の 要 旨

## 論文題目

寺山修司研究—アングラ文化における言語表現—

氏 名 : 劉 夢如

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 梶尾 文武 准教授  
(副) 樋口 大祐 教授  
(副) 大橋 完太郎 准教授

寺山修司（一九三五～八三）は、一九六〇年代から八〇年代にかけて、演劇をはじめ映画、ラジオドラマ、詩、短歌、俳句、評論など多ジャンルで活躍し、アンダーグラウンド文化の旗手となった表現者である。寺山の旗揚げによって創立した演劇実験室天井桟敷は、一九六七年から解散の一九八三年まで、実験的な演劇活動で注目を集めた。初期の見世物、市街劇と野外劇、密室劇、古典作品の翻案などが、寺山の演劇作品群を構成している。

文学から出発した寺山修司は、天井桟敷の創立をもって演劇の実践へと轉身し、「文学ばなれ」を唱えはじめる。この理念には、言葉を制度として捉え、演劇を言葉の外部へと離脱させる志向が見られる。しかし、彼が目指した「文学ばなれ」それ自体も饒舌な演劇論と言語論、言語表現が豊かな作品によって支えられている。寺山自身は「文学ばなれ」の不可能性を認識し、ここに「言葉によって呼び出した世界の人達としか出会っていない演劇の不毛性」と認めつつも<sup>1</sup>、多岐な手法を通してこの逆説的な試みを継続したのである。本研究は、寺山の「文学ばなれ」のプロセスに注目し、寺山の「台本」をはじめ、古典の現代語訳や長編詩などの言語表現を主要対象として考察を展開してきた。

第一部では、寺山の「密室劇三部作」における「始源の言葉」という問いについて考察した。

第一章「戯曲「阿呆船」論—演劇の不毛性—」では、戯曲「阿呆船」（一九七六）がミシェル・フーコーの『狂気の歴史』（新潮社、一九六五）から、「外の思考」や「阿呆船」のモチーフを得たことを考察した。寺山作品が、「外」の存在を論ずる六〇年代のフーコーの言説から影響を受けながらも、「外」の存在を否定する七〇年代のフーコー言説に接近していることを検討した。山口昌男の「道化」論が寺山作品に影を落としたことを考察した。登場人物の「眠り男」と「影の男」における「未分化」の傾向が、「零度の理性」を喩えていることと、「黒衣」が劇中劇という構造を提示していることを分析した。それを踏まえ、寺山が言う「演劇の不毛性」という、「文学ばなれ」の不可能性についての問題意識を明らかにした。

第二章「戯曲「疫病流行記」論—「行為」と「経験」としての沈黙—」では、戯曲「疫病流行記」（一九七五）において、疫病のように蔓延し、伝染するのは、病そのものよりも想像力あるいは言葉であるというテーマに注目した。登場人物が「役」から「役を演じる俳優」への轉身、「台本担当」や「舞台監督」などの劇場のスタッフの登場による劇中劇の構造を指摘した。この構造が、想像力あるいは言葉の伝染という主題をいっそう強意し、言語批判を示していることを指摘した。それを踏まえ、劇中に反復される「釘を打ちこむ」という行為に着目し、言葉の役割が言語表現ではなく、行為に託されるというモチーフを考察した。作品の最後に、疫病のような言葉に汚染されていない無人島が現れるが、そこに、行為という真の言葉が「始源的なもの」として捉えられることを検討した。

第二部では、寺山作品の「古典への回帰」という傾向を、シナリオ・戯曲・古典現代語訳のテキストに基づいて考察した。

第三章「シナリオ「草迷宮」論—分裂の構造—」では、寺山のシナリオ「草迷宮」（一九七八）と泉鏡花の原典との間テクスト的な関係を明らかにした。特に鏡花原典における母への幻想についての表現・美女菖蒲についての表現と、寺山のシナリオにおける母の発話、美少女美登利についてのト書きを比較した。同時代の澁澤龍彦からの影響、バシュールの思想の受容を文脈的に考察した。このシナリオに見られる分裂の時空構造、主人公明をはじめとする登場人物のイメージの複数化、魔性と母性が共存する黒門屋敷・水・球

体のシンボルの多義性を解明した。

第四章「戯曲「身毒丸」論—コラージュとしての見世物—」では、戯曲「身毒丸」（一九七八）と説教節「信徳丸」「愛護若」とを比較し、説教節から流用した寺山作品のテキストを確認した。登場人物の「継母」の形象が「蛇娘」「鬼子母神」「徳利娘」「遊女」に複数化することを分析した。寺山流の流離譚における、松田修の流離譚の論考・山口昌男の「道化」説・ミシェル・フーコーの「狂気—理性」の言説との繋がりを確認した上で、「畸形」や「見世物」といったキーワードが喚起する差別問題を考察した。寺山の翻案におけるコラージュのような手法を例証した。

第五章「古典現代語訳『新釈稲妻草紙』論—言葉の中の分身—」では、江戸戯作者山東京伝の読本『昔話稲妻表紙』（一八〇六）の現代語訳としての『新釈稲妻草紙』（一九七四）を考察した。二作のテキストを精査した上で、寺山の書替えた箇所を確認した。原作の登場人物が善悪対立の性格を持っているのに対し、寺山作品の人物の二元的性格が曖昧化されることを検証した。寺山作品が「下ネタ」の要素と「物真似」の手法を通して笑いを取り、原典の規範を破る性格を持つことを明らかにした。書替えによって加わられた人物が「言葉」の中にしか登場してこないため、『新釈』の物語世界が「言葉」から離れられないこと、言い換えれば「文学離れ」の不可能性を示していることを考察した。

第三部「寺山修司と同時代の表現者」では、寺山と同時代のアングラ文化の表現者とのつながりを整理し、寺山をアングラ文化において位置づけることを試みた。

第六章「土方巽「病める舞姫」と寺山修司長編叙事詩「地獄篇」—非制度と反制度—」では、舞踏家の土方巽の「病める舞姫」（一九七七～七八）と、寺山の「地獄篇」（一九六三～六五）とを東北の風土に根ざすテキストとして捉え、二作の共通点と相違を検証した。回想の手法、「眼球」のモチーフによる自己の脱主体化、「見えない」ものに操られるからだなどの点において、二作が共通していることを指摘した。寺山のテキストが先行作品として、土方作品への間テキスト的な影響を試論した。しかし、寺山作品が社会的文化的な制度に疑う反制度の傾向を持っているのに対し、土方作品が自然に馴染み、社会や文化から離れた非制度の傾向を持っていることを考察した。

第七章「小劇場運動第一世代の言語論と台本—始源の言葉—」では、小劇場運動の新劇批判と、新劇の劇作家による反批判を整理した。それを踏まえ、別役実・鈴木忠志・唐十郎・寺山修司・太田省吾といった小劇場運動の代表的な劇作家の演劇理論と台本を読み比べた。彼らが試行した戯曲の構造の複数化、俳優の主体を重んじたパロール、即興、沈黙などの方法を考察した。従来の戯曲が前提としてきた文学性の主導権を否定した小劇場運動の演劇実践は、しかし、まさにその饒舌な理論によって反文学の不可能性を示している。代表的な小劇場運動の劇作家らはこの敗北を自ら認めながら、意味伝達の中心化する文学を超え出る「始源の言葉」（寺山）を模索し続けたことを明らかにした。

付録「雑誌『地下演劇』（一九六九～一九七九）総目次・執筆者一覧」では、寺山が編集に携わった『地下演劇』という演劇理論誌の目次と執筆者を整理した。そこに寄稿していたのは、同時代の各ジャンルの文化人である。演劇の領域では、芥正彦・堂本正樹・山崎哲、映画の領域では、篠田正浩・飯村隆彦、美術の領域では、横尾忠則・高松次郎・中村宏・栗津潔、舞踏の領域では、土方巽・笠井叡・暦赤児、文学の領域では、澁澤龍彦・高橋康也・松田修、写真の領域では、中平卓馬・荒木経惟・森山大道、人類文化学研究では、山口昌男、また評論家である利光哲夫・扇田昭彦・松田政男・市川浩・松永伍一・三

浦雅士・津村喬・市川雅・東野芳明・宇波彰などが『地下演劇』に寄せていた論考を一目瞭然に整理した。

以上は、各論の概要である。しかし、現段階で課題を積み残した。序章では、寺山の演劇作品群を、概ね初期戯曲、市街劇と野外劇の時代、密室劇の時代、古典翻案の時代という四つの時期に分けて取り上げている。第一部、第二部の各論は、主に密室劇・古典の翻案に着目したが、初期戯曲・市街劇についてはまだ確実に検証できていない。寺山の演劇作品を扱う際、それらを「演劇」と呼ぶべきか、「戯曲」と呼ぶべきか、迷うことが多かった。そのため、目の前にある活字資料を対象とし、「台本」という言い方で対応している。だが、「台本」の創作者は寺山だけではなく、その時その場で劇場に実在した集団である。いかに「寺山修司」を主語として正確に使うか。本研究は、なるべくこれらの問題を意識しながら、研究対象にアプローチしてきたつもりである。

寺山の表現活動は多岐にわたる。本論文はその戯曲を中心に、シナリオ・古典現代語訳・長編詩を論じてきたが、まだ検討できていない演劇の作品と他のジャンルの作品が多数ある。また、寺山演劇を論ずるには、同時代の小劇場運動の作家の作品、同時代の新劇の作品、さらに他の時代の演劇を比較項として読む必要がある。このように未解決の課題がまだ残っているが、著者は本論文が寺山修司研究の一つの小さな成果になることを望んでいる。この成果は結果ではなく、今後の継続的な研究の出発点となるはずである。

---

<sup>1</sup> 寺山修司×岸田理生×小竹信節×浅井隆×樋口隆之×森崎偏隆「阿呆たちは故郷をめざす」、『地下演劇』第一一号、一九七七・五